

EPEC-O の翻訳および日本の文化的背景に応じた改変を行い腫瘍医及に対する緩和ケア教育プログラムが開発され、またそれに関連したコミュニケーション教育プログラムおよびそれに使用する教育用ビデオの開発が行われた。また、上記の資料を使用して日本で初めて腫瘍医に対して組織的な緩和ケア教育プログラム(EPEC-O)の実践を行い、参加者の緩和医療の実践能力の向上を図った。参加者のアンケートの結果より、参加者のセミナーの本研究により腫瘍医及に対する緩和ケア教育プログラムが開発され、またそれに関連したコミュニケーション教育プログラムおよびそれに使用する教育用ビデオの開発が行われた。また、開発されたプログラムを使用して日本で初めて腫瘍医に対して組織的な緩和ケア教育プログラム(EPEC-O)の実践が行われた。今後は本プログラムの腫瘍医への普及を通して、がん患者およびその家族の QOL の向上に寄与していきたいと考えている。む声が強かった。また、全体として講義よりロールプレイやディスカッションといった小グループ討議や体験型学習の満足度が高かった。今後は参加者からの意見をもとに、教育プログラムの改変を行い、日本緩和医療学会教育研修委員会を中心に本プログラムの腫瘍医への普及を図ることを通して、がん患者およびその家族の QOL の向上に寄与していきたいと考えている。

## E. 結論

本研究により卒直前の腫瘍医に対する緩和ケアの学習目標に基づいた、実施可能な緩和ケア教育プログラムが開発され、またそれに関連したコミュニケーション教育プログラムおよびそれに使用する教育用ビデオの開発が行われた。また、開発されたプログラムを使用して日本で初めて腫瘍医に対して組織的な緩和ケア教育プログラム(EPEC-O)の実践が行われた。今後は本プログラムの腫瘍医への普及を通して、がん患者およびその家族のQOLの向上に寄与していきたいと考えている。

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

1) 木澤義之: 緩和ケアにおける医師の卒後研修の現状と展望 ホスピス緩和ケア白書2006, 12-16 (財) 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団「ホスピス緩和ケア白書2006」編集委員会編, 大阪, 2006.

### 2. 学会発表

該当なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況

### 1. 特許取得

該当なし

### 2. 実用新案登録

該当なし

### 3. その他

特記すべきことなし

厚生労働科学研究費補助金(がん臨床研究事業)  
分担研究報告書

大学における効果的かつ効率的ながん専門医の育成方法に関する研究

分担研究者 佐伯 俊昭 埼玉医科大学教授

研究要旨 卒後教育の1つとして認定医・専門医を目指した教育カリキュラムが重要である。乳腺領域では、日本乳癌学会・日本検診学会が専門医試験並びに教育プログラムを作成している。特に乳癌検診に必須であるマンモグラフィの読影講習会を開催し、教育内容について検討した。

A. 研究目的

卒後教育として専門医試験に着目し、日本乳癌学会、マンモグラフィ読影専門医のカリキュラムについて検討する。

B. 研究方法

マンモグラフィ読影講習会を開催し、参加者にアンケートをとる。  
(倫理面への配慮)  
無記名とする。

C. 研究結果

平成18年2月4-5日に埼玉医科大学で開催したマンモグラフィ読影講習会は49名の医師が参加した。2日にわたる講義と実習結果 32名の読影専門医が認定された。

D. 考察

卒後教育は医師のインセンティブが重要である。専門医を取得することで経済的なメリットは重要であるが、保険診療が行なわれているわが国では現実性に乏しい。そこで資格試験としてではなく、専門医取得がある程度の社会的評価を受けるために日本医師会をティアップした検診マンモグラフィ読影専門医は重要である。

E. 結論

卒後教育における専門医カリキュラムは医師の資質の向上に役立ち、社会に貢献すると考えた。

G. 研究発表

1. 論文発表

高塚雄一、渡辺 亨、伊藤良則、岩田広治、大野真司、日馬幹弘、小林 直、佐伯俊昭、鹿間直人、徳田

裕、佐野宗明、田部井敏夫、晴山雅人、福井次矢、光山昌珠、池田 正、安藤二郎、稲治英生、岩平佳子、高橋かおる、福富隆志、日本乳癌学会(編)、化学的根拠に基づく 外科診療ガイドライン ②外科療法 2005年版、金原出版、東京 2005

佐治重豊、佐々木常雄、平田公一、久保田哲朗、古畑智久、福井次矢、小山 弘、新保卓郎、戸井雅和、石岡千加史、松井邦彦、朝長万左男、佐伯俊昭、坂巻 壽、伊藤良則、陣内逸郎、辛 栄成、塚崎邦弘、岩田広治、渡辺 隆、渡辺 亨、清水一之、鹿間直人、村上博和、田島知郎、大塚竜三、抗がん剤適正使用のガイドライン 乳がん、International Journal of Clinical Oncology 10:15-55、2005  
佐伯俊昭、家族性乳がんの遺伝子診断、毎日ライフ 10:103、2005

2. 学会発表

佐伯俊昭、チーム医療 乳がん看護専門看護師のカリキュラム/チーム医療と乳がん看護、第6回乳癌最新情報カンファランス、2005.7.22  
佐伯俊昭、みんなで考えよう乳癌診療、第6回乳癌最新情報カンファランス、2005.7.22

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし

効果的かつ効率的ながん専門医の育成方法に関する研究  
分担研究「優れたがん専門医育成の基盤となる卒前医学教育のあり方に関する研究」

分担研究者 神津 忠彦 東京女子医科大学顧問・名誉教授

研究要旨 卒前医学教育について、良医の育成をめざして医学生全員が到達すべき「コア・カリキュラム」と、将来臨床腫瘍医を志す医学生に選択的に提供するための「がん診療をめぐる特色ある卒前教育カリキュラム」の内容を整理し、具体的な行動目標を設定する作業を行った。作業はなお進行中であるが、この作業を通して目標達成のための効果的な教育方法や目標に対応した到達度評価方法を設定するための基礎的枠組みが次第に明らかになりつつある。

#### A. 研究目的

本分担研究の研究目的は、初年度の研究報告書で述べたごとく、①将来優れたがん専門医となるために必要な卒前医学教育の内容を整理して、すべての医学生が卒業までに身につけるべき「コア・カリキュラム」と、臨床腫瘍医を志す医学生に提供するための「特色ある卒前カリキュラム(オプション)」とを設定し、それぞれの項目に「具体的行動目標」を設定すること、②これらの目標を達成するための効果的な教育方法を明らかにすること、③到達目標を達成したか否かを判定する到達度評価の方法を考案すること、④目標を達成するために医学部・医科大学及び個々の教員に求められる教育能力を明示し、能力育成のためのファカルティ・ディベロップメント・プログラムのあり方を考察すること、⑤卒前教育と卒直後教育との接続に関して配慮すべき事柄を明らかにすること、⑥がん専門医の育成に焦点をあてた医学教育の現況について、世界の現状を調査研究すること、などである。

#### B. 研究方法

文部科学省医学・歯学教育の在り方に関する調査研究協力者会議が提唱した「モデル・コア・カリキュラム」の内容から、がん専門医育成のために必要な卒前教育の内容を抽出し、到達目標を見直す作業を昨年開始したが、今年度も引き続きこの作業を行いながら、臨床腫瘍医を志す医学生へ選択科目として提供する「臨床腫瘍医育成のための特色ある卒前教育カリキュラム」として追加すべき項目を順次整理した。

#### C. 研究結果

「優れたがん専門医を育成するための特色ある卒前教育」の項目とその具体的到達目標の作成が進行中である。なお、臨床腫瘍医育成の視点からは、「死を

めぐる医学教育」、「がん関連の社会問題・環境問題に対する卒前教育」などの新たな枠組みが必要であることが明らかとなった。

#### D. 考察

2001年3月に提示された「モデル・コア・カリキュラム」を見直したところ、多くの項目について広さと深さの見直しが必要であると考えられた。

「臨床腫瘍医育成のための特色ある卒前教育カリキュラム」は卒直後教育との関連の中で整合性を検討し、分担のしかたと卒前から卒後への継続性を付き合わせる必要がある。

#### E. 結論

モデル・コア・カリキュラムのうち、がん診療に関連する項目を抽出し、具体的到達目標を見直した。さらに臨床腫瘍医育成のための選択的プログラムとして、特色ある卒前教育として提供すべき教育内容が明らかになりつつある。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

- 1) Toshimasa Yoshioka, Taiyo Sukanuma, Ann C. Tang, Susumu Matsushita, Sumie Mannok, Tadahiko Koza: Facilitation of problem finding among first year medical school students undergoing problem-based learning. Teaching and Learning in Medicine 2005;17(2):136-141.
- 2) 神津忠彦:教育機関におけるファカルティ・ディベロップメントの現状と課題. 日本看護学教育学会

雑誌 2005;15 (2):71-77.

- 3) Tadahiko Kozu: Clinical education in Japanese medical schools. Korean Society of Medical Education ed: Clinical Education \_ Contents book of the 17<sup>th</sup> Annual Meeting of Korean Society of Medical Education. Seoul, Korean Society of Medical Education, pp.13-21, 2005.
- 4) Kozu Tadahiko: Curricular innovations in medical education in Japan. Medical Education Unit YongLoo Lin School of Medicine ed: Curriculum TIPS \_Contents book of the 3<sup>rd</sup> Asia Pacific Medical Education Conference, Singapore, National University of Singapore, p.60, 2006.

## 2. 学会発表

- 1) Tadahiko Kozu: Special lecture: Clinical education in Japanese medical schools. 17<sup>th</sup> Annual Meeting of Korean Society of Medical Education, Daegu City, 2005-05-26
- 2) James Toouli, Geoffly Metz, Tadahiko Kozu, Christian Gluut: Symposium: WGO-OMGE Train the Trainers\_A program for developing excellence in training accross the world. World Congress of Gastroenterology, Montreal, 2005-09-14
- 3) Kozu Tadahiko: Curriculum innovations in Medical Education in Japan. 3<sup>rd</sup> Asia Pacific Medical Education Conference. Singapore, 2006-02-21.

医科大学の卒前・卒後教育における効果的かつ効率的ながん診療医の育成方法に関する研究

分担研究者 江口 研二 東海大学医学部内科学系教授

**研究要旨** 卒直後の初期研修におけるがん診療の教育体系に必要な内容を検討し、本邦における効果的な、がん診療の卒直後初期研修教育システムを考察とした。がん医療の関連諸団体の教育研修委員会などとの整合性を考慮しつつ、また、海外のがん関連学会の臨床腫瘍医研修共通カリキュラムなどを参考に、がん緩和医療分野などをふくむ初期卒後教育のカリキュラム概要を検討・作成した。卒直後の初期研修医に対しては、がん医療に関する高度な専門的知識よりも、がん医療に必須である患者・家族とのコミュニケーション技術や、一般医療技能として、実践的な医療倫理に対する認識の修得を第一目標とし、あわせて基礎と臨床との橋渡しの重要なプロセスであるトランスレーショナルリサーチや標準治療のエビデンスとなる臨床試験の意義などへの認識も修得させる必要がある。

**A. 研究目的**

本分担研究の目的は、現状での診療各科に任されたがん診療に関する卒後初期研修期間に行われている教育体制を分析し、今後、がん診療の教育体系に必要な内容の検討を行い、本邦における効果的な、がん診療の研修教育システムのあり方をまとめることである。がん診療における薬物療法、放射線治療、外科療法、緩和医療など広範な医学領域での急速な進歩により、がん診療全般に関する横断的な知識をいわゆる臨床腫瘍学として修得させる必要となっている。また、患者・家族などの意見の集約として、全国的にがん患者が良質で均質ながん診療を享受するためには、現状のような診療各科に任された教育体制では、不十分であることが大きく社会問題として取り上げられてきた。効果的・効率的ながん専門医の育成を実現させるために、このような本邦でのがん診療に関する教育体制を改善することは現在の緊急的課題と言える。

**B. 研究方法**

医科大学における卒前の臨床腫瘍学教育体制を会わせて検討し、卒直後の初期研修医制度の体制が定着しつつある中で、がん医療の関連諸団体の教育研修委員会などとの整合性や、海外のがん関連学会の臨床腫瘍医研修共通カリキュラムなどを参考に、卒後

初期研修期間に実施すべき、がん医療の分野における望ましい初期卒後教育カリキュラム概要モデルを検討・作成する。

(倫理面への配慮)

研究の倫理面の配慮に関しては、がん診療に携わる初期研修医師に対して、症例に即した医療倫理の認識について教育できる共通カリキュラムを作成する。  
2) 医療における個人情報保護およびH16年より実施された個人情報保護法に基づく診療の教育カリキュラムを作成する。

**C. 研究結果**

がんの診療に携わる医師に対する統一的な教育体系は、卒前医学部教育では、臨床腫瘍学に関する全国統一カリキュラムが存在せず、医科大学の対応に任されている。卒後教育については、がん診療関連諸学会による教育体制も、現在整備途上であり、腫瘍学全般を網羅しうるものとしては、わずかに、日本臨床腫瘍学会のがん薬物療法専門医制度にもとづく教育カリキュラムおよび全国がん成人病センター協議会レジデント制度が存在するのみである。各医療機関での卒後初期研修医に対する現状における教育は、ローテート先の各科の自主性に任されており、体系化されたがん診療に関する教育研修は行われていない。卒直後の初期研修医の場合には、がん医療に関する高

度な専門的知識よりも、むしろ、がん医療に特に重要である患者・家族とのコミュニケーション技術や、臨床現場に要求される医療倫理の実践的な認識の修得を第一目標とし、あわせて基礎と臨床との橋渡しの重要なプロセスであるトランスレーショナルリサーチや、標準的治療のエビデンスとなる臨床試験の意義などの認識も習得する必要がある。基本的なこの内容に即したモデル的な教育スケジュールを設定し、初期研修期間の教育に関して、適切なあり方を模索した。

日本緩和医療学会の教育研修委員会と合同で、ASCOやESMOの臨床腫瘍学研修共通カリキュラムなどを参考に、がん緩和医療の分野での初期卒後教育のカリキュラム概要を作成し、年次ごとの修得目標に関するシラバスを作成した。上記の医療倫理や臨床試験などいわゆるMedical Oncology (臨床腫瘍学)に関わる領域の初期研修医に対する教育カリキュラムを検討した。

上記の検討を経て、医科大学の臨床腫瘍学講座、腫瘍内科など臨床腫瘍学専門診療科を横断的に連携する連絡協議会を企画した。

#### D. 考察

がん診療に携わる医師に対する体系的な専門教育は、現在本邦で成立していない。卒前の医学部教育では、臨床腫瘍学に関する講座が存在しないために、医科大学診療各科に任されており、統一的な体制をとれない。本研究は、現状での診療各科に任されたがん診療に関する医学部教育、および、卒後初期研修期間に行われている教育体制を分析し、今後、がん診療の教育体系に必要な内容の検討を行うことである。40年前に臨床腫瘍学講座が設置された欧米では、医科大学においても、あるいは卒後教育においても体系化された教育体制となっている。本邦では、卒後専門教育として、日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医制度をささえる教育カリキュラム、および国立がんセンターを中心とした全国がん成人病センター協議会レジデント制度などが存在するのみである。本研究は、卒後の初期研修を包括したがん診療の体系的な教育のあり方を検討する点で非常に意義のあるものと考えられる。

卒直後の初期研修医に対しては、がん診療の中でもベーシックな技能すなわちコミュニケーション技術や医療倫理認識の修得を第一目標とする必要がある。レジデントや研修期間に異なる研修施設間で研修医の交流をすることは、他流試合の経験を積ませること、全国多くの仲間をつくること、がん診療に関する共通の認識を培うことなどの多くの利点があり、さらに上級のがん専門医を育成する際に、望ましい基盤となる。

#### E. 結論

がん緩和医療の分野における初期卒後教育のカリキ

ュラム概要などをモデルとして、卒後初期研修期間におけるがん診療教育のあり方をした。その際のがん医療の関連諸団体の教育研修委員会などとの整合性を考慮し、海外のがん関連学会の臨床腫瘍学研修共通カリキュラムなどを参考にした。Medical Oncology (臨床腫瘍学)の領域全体にわたる初期研修医に対する教育カリキュラムとしては、がん医療に関する高度な専門的知識よりも、むしろ、がん医療に必須である患者・家族とのコミュニケーション技術や、実践的な医療倫理に対する認識の修得が必要であり、あわせて基礎と臨床との橋渡しの重要なプロセスであるトランスレーショナルリサーチや、標準治療のエビデンスとなる臨床試験の意義などの認識も修得させる必要がある。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

瀬戸貴司, 江口研二

小細胞肺癌の最新標準治療

成人病と生活習慣病(1347-0418)35巻3号 Page293-297(2005.03)

Ichinosuke Hyodo, Noriko Amano, Kenji Eguchi, Masaru Narabayashi, Jiro Imanishi, Midori Hirai, Tomohito Nakano, Shigemitsu Takashima  
Nationwide survey on complementary and alternative medicine in cancer patients in Japan.  
J Clin Oncol. 2005 Apr 20;23(12):2645-54. Epub 2005 Feb 22.

田仲曜, 永島浩子, 奥山徹, 江口研二

保険医療となった癌緩和ケアチームとは 日本胸部臨床(0385-3667)64巻1号 Page22-30(2005.01)

Yoshiyuki Abe, Kouzou Hanai, Makiko Nakano, Yasuyuki Ohkubo, Toshinori Hasizume, Toru Kakizaki, Masato Nakamura, Noboru Niki, Kenji Eguchi, Tadahiko Fujino, Noriyuki Moriyama  
A Computer-aided Diagnosis (CAD) System in Lung Cancer Screening with Computed Tomography. Anticancer Research 25; 483-8, 2005

江口研二 肺癌検診—現状と今後— 肺癌 最新医学別冊 呼吸器5 p47-56、  
阿部庄作 編 最新医学社 大阪 2005年

Satoshi Morita, Kunihiko Kobayashi, Yasuo Ohashi, Kenji Eguchi, Masahiko Shibuya, Taketoshi Matsumoto, Yasufumi Yamaji, Keiichi Nagao, Junichi Sakamoto, Hisanobu Niitani, Weekly Assessment of Quality of Life in Patients with Advanced Non-sma

II-cell Lung Cancer during Chemotherapy in a Randomized Phase III Trial.. Ann Cancer Res and Therapy 12; 105-17, 2004

Satoshi Morita, Kunihiko Kobayashi, Kenji Eguchi, Taketoshi Matsumoto, Masahiko Shibuya, Yasufumi Yamaji, Yasuo Ohashi. Analysis of incomplete quality of life data in advanced stage cancer: A practical application of multiple imputation. Quality of Life Research 14; 1533-44, 2005

江口研二 清水英二 監訳 ギンスバーグ 肺癌 アメリカ癌協会 臨床腫瘍学カラーアトラス  
西村書店 東京 2005

厚生労働科学研究費補助金(がん臨床研究事業)  
分担研究報告書

大学における効果的かつ効率的ながん専門医の育成方法に関する研究

分担研究者 田村和夫 福岡大学医学部内科学第一

研究要旨 臨床腫瘍学を体系づけて学習できるように、ウェブサイト上に学習サイトを全面的に開設した。がん専門医の育成には、卒前教育から卒後臨床教育まで首尾一貫した教育体制が必要であり、集学的治療のみならず、チーム医療の中で全人的なアプローチの理解も必要である。また、医療の質のレベルの向上とがん専門医の育成にはがん専門看護師・薬剤師の養成も不可欠である。

### A. 研究目的

がんの診療には各臓器腫瘍の生物学的特性を理解した上で検査・治療を実施することが求められる。がん治療は外科、放射線、薬物療法が主であるが、それぞれの治療法を正しく理解した上で、これらを駆使した集学的治療が必要であり、特に、がん薬物療法・支持療法・臨床試験に精通したがん専門医の存在は不可欠である。

がん専門医の育成には、卒前・卒後の一貫した教育が必要で、その学ぶべき知識は膨大で従来型の講義のみでは不十分である。すなわち各関連科、領域が横断的かつ有機的に統合されてがん診療が行われている場で、教育がなされることが理想的である。そのためには医師のみならず、同時にがん専門の看護師、薬剤師、その他のコメディカルを育成することが必要で、結果として現場での意識レベルの改革とさまざまな波及効果をもたらし、チーム医療として高いレベルの医療を実践できるようになると考えられる。

### B. 研究方法

#### 1) ウェブサイトを用いた卒前・卒後学習サイトの開設

臨床腫瘍学を系統的に学ぶことができる学習サイトをウェブサイト上に構築する。腫瘍学の基礎から、実地医療レベルまでの資料を作成し、卒前・卒後研修にいつでもアクセスし自己学習できるようにした。(倫理面への配慮)

ケーススタディでの症例提示にあたっては、患者の名前、生年月日など患者が特定できないような配慮をした。

#### 2) がん専門看護師・薬剤師の養成講座の開設

平成16年2月に特定非営利活動法人 臨床血液・腫瘍研究会(Clinical Hematology Oncology Treatment Study Group)を設立し、がん専門看護師・薬剤師の基礎・上級コース育成講座を開催した。

#### 3) 集学的治療カンファレンスの開催

腫瘍外科医・内科医、放射線科医、病理医、看護師、薬剤師、検査技師等の多職種からなる集学的治療カンファレンスを開催し、卒前・卒後の研修の一環として研修医や医員がケースプレゼンテーションをし、学生を参加させる。

### C. 研究結果

1) ウェブサイトを用いた卒前・卒後学習サイトの開設  
すでに造血器腫瘍の病理・臨床、固形がんの病理、がん治療の実践に役立つマニュアル、19症例のケーススタディを当科学習サイトに掲載し、講義のみならず、自宅での学習に利用している。今年度は腫瘍生物学から臨床まで臨床腫瘍学に必要な資料の作成を終えた。症例をあらかじめ予習させて質問を受け付け、1例を試験問題として出したが、まだ慣れないせいか、よく理解できていない学生が多かった。これからの課題として自学自習の指導の仕方について検討すべきであると考えた。

#### 2) がん専門看護師・薬剤師養成講座の開設

平成16年より開設した養成講座は、本大学で実施したが、遠方からの受講生は費用と時間がとれないため参加ができないことも多いので、今年度は鹿児島と沖縄にて出前講座を実施した。平成17年10月より基礎コースの養成講座も昨年度に引き続いて行なった。講義は腫瘍内科医、がん専門看護師・薬剤師、臨床研究支援者、ケースワーカー等の多職種が担当し、九州各地からの多数のコメディカルの参加があった。

#### 3) 集学的治療カンファレンスの開催

現在、当院では集学的治療カンファレンスとして、

乳腺疾患を月一回、肺癌ならびに消化器癌を隔月一回開催している。毎回、各職種による講義、術後補助療法、問題症例の検討を行っており、各職種からの意見を参考に問題を解決する能力が養成されている。また学生や研修医・医員はカンファレンスに参加することにより、病態解明に必要な検査や治療の技術を学びチーム医療の重要性を認識できるようになっている。

#### D. 考察

卒前教育では、系統だった臨床腫瘍学の講義・実習はほとんど行われておらず、臓器ごとに縦割りで行われている。一方、平成16年より新卒後研修プログラムが開始されたが、最低限の基本知識と基本手技の習得のみに追われ、臨床腫瘍学を体系づけて研修する場が存在しない。そこで、基礎医学から臨床医学まで一貫して学習できる資料を作成し、ウェブサイト構築することは卒前教育・卒後研修に有用な一つの方法であると考えられる。欧米では、大学のカリキュラムに臨床腫瘍学が組み込まれているところが多く、講義ばかりでなく臨床腫瘍科あるいは血液・腫瘍内科の外来・病棟修練が行われている。また、インターネットを通じて、病理診断や画像を用意している施設も存在する。わが国でも早期に内科学の中に臨床腫瘍学を位置づけ、卒前・卒後研修制度が確立されることが望まれる。

また、がん診療には全人的アプローチが必要であり、実地医療の中で研修することは重要である。本来、診療と教育は表裏一体の関係であり、講義のみで診療が理解できるものではない。すなわち、臨床腫瘍学の教育は実地診療の中で行われなければ実効があがらない。がんの診療はコメディカルをまきこんだチームで医療である。チーム医療の中心的な役割を担っているのは医師ばかりでなく看護師や薬剤師である。従って臨床腫瘍医の育成には、がん専門看護師・薬剤師の養成が重要であり、今年度も養成講座を継続して実施した。遠隔地からの参加も多数あり、また来られない医療者のために、出前講座も開設した。受講者が所属する各医療機関・地域のがん診療チームの中心的な役割を担い、波及効果から診療レベルが上がることを期待している。現在大きな問題となっている地域医療格差を是正し、がん診療レベルの均てん化につながるものと期待している。

また、日常診療で、臨床腫瘍医や修練中の医師ば

かりでなく、がん専門看護師・薬剤師、その他の職種の回診や集学的治療カンファレンスへの参加は、チーム医療の重要度を認識し、個々の症例の問題解決能力の向上をもたらす、重要な修練の場であると考える。さらにこれが大学内にとどまらず各地域の医療機関と連携して、地域がん登録、検査・治療の充実、臨床試験の実施に発展していくよう努力しなければならない。

#### E. 結論

- ・ ウェブサイトを利用して、臨床腫瘍学の基礎から実地医療の学習サイトを構築した。
- ・ がん専門看護師・薬剤師の育成講座を平成17年度も継続して開設し、コメディカルの養成を行った。また出前講座も2回実施した。
- ・ 集学的治療カンファレンスを開催し、卒前教育・卒後研修の一環として参加することで、腫瘍学の知識の習得と問題解決能力の育成を試みた。

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

田村和夫. 専門医が果たす役割1. 臨床腫瘍専門医と社会への貢献. 臨床医31:1317-1320, 2005

田村和夫. 臨床腫瘍学の現状と展望 IV. がん治療をめぐる欧米と日本の違い. Progress in Medicine 25:39-43, 2005

田村和夫. 欧米における腫瘍内科医. Modern Physician 25:1211-1216, 2006

##### 2. 学会発表

田村和夫. 乳癌標準薬物療法普及に向けて-専門医育成について-第43回日本癌治療学会総会ワークショップ11 2005年10月25日 名古屋市

田村和夫. 日本の血液専門医のいま、そして明日を考える. 日本の専門医制度-血液専門医と専門病院の現状-第67回日本血液学会総会、第47回日本臨床血液学会総会パネルディスカッション 2005年9月18日 横浜市

厚生労働科学研究費補助金(がん臨床研究事業)  
分担研究報告書

大学における効果的かつ効率的ながん専門医の育成方法に関する研究

分担研究者 直江 知樹 名古屋大学大学院医学系研究科 教授

研究要旨 大学病院での臓器横断的「がん薬物治療」を推進し、「がん専門医の育成」のための問題点を整理し、その解決に向けた取り組みを進めている。昨年度より、(1)卒前教育として、臨床腫瘍学のカリキュラムを組み、科学的かつ倫理的ながん薬物治療を行う人材の育成を行ってきた。(2)大学病院において「外来化学療法部」を設置し、「がん薬物療法」を臓器横断的に支援する組織として活動を開始した。今年度はこれらを継続するとともに、(3)大学病院における、安全で質の高い「がん薬物療法」の推進のため、「静脈注射ワーキンググループ」を発足させた。「抗癌剤取り扱いマニュアル」の作成、抗癌剤による院内環境の汚染調査、勉強会・報告会の開催、実地指導による啓蒙活動、調剤から実施に至るシステムの見直しと整備、電子カルテオーダーリングシステムへのプロトコール認証機能の付加に向けた検討を行った。

#### A. 研究目的

大学病院においては、近年では臓器別診療科制への移行が進んでおり、臓器横断的な診療が行い難いとの指摘がある。特に大学病院では、各診療科の専門性・独創性の高さから、各科の独自性を強く尊重し診療科毎に研鑽を重ねてきた歴史があり、学生の卒前教育や若い医師への臨床教育においても、臓器別の視点からの病態や診断に重点を置いた講義・実習が行われてきた。それは、がん薬物治療の領域においても、抗癌剤の取り扱い体制や教育体制など診療全般に広く及んでいる。

一方で、これからの質の高く安全な「がん薬物療法」を推進するためには、腫瘍内科学全般にわたる臓器横断的な知識を持った専門医の養成が必要と考えられている。EBMの実践や科学的かつ倫理的な診療・臨床研究を推進するためにも、卒前・卒後を通じて臨床腫瘍学の目標を明らかにし、その教育方法、教育体制、更に評価法の整備が不可欠である。

本研究では、大学病院全体での臓器横断的「がん薬物療法」を推進し、「がん専門医の育成」に向けての問題点を明らかにし、その解決のためのタスクフォースを立ち上げようとするものである。

#### B. 研究方法

1. 卒前教育として、臨床腫瘍学のカリキュラムを組み、がん薬物治療において科学的・倫理的な考え方の出来る人材の育成を図る。
2. 大学病院として、がん薬物療法を臓器横断的に支援する組織を構築する
3. 大学病院における、安全で質の高い「がん薬物療法」の推進のため、「静脈注射ワーキンググループ」を

発足させ、院内体制の整備を推し進める。

#### C. 研究結果

1. 医学部授業での「臨床腫瘍学」の開講(90分授業5コマ)  
「臨床腫瘍学入門」「癌の生物学・分子遺伝子学」「化学療法と標的治療」「免疫・細胞治療」「臨床研究とEBM」
2. 大学病院において、「外来化学療法に関する懇談会」を設置し、外来化学療法の実態・問題点を調査した。外来化学療法は年々増加傾向にあるが、外来での点滴体制が整備されていないため入院を余儀なくされているケースも見られた。この調査結果を基に、外来化学療法のための専任スタッフを設置する事を病院執行部に提言し、「外来化学療法部」の発足に至った。現在、具体的な実施に向けての各部署・診療科間の調整、院内体制の整備を進めている。
3. 各診療科から医師(集中治療室、血液・腫瘍内科、外科、小児科・NICU、外来化学療法部、医療経営管理部)、看護部(内科病棟、腹部外科病棟、小児科病棟、外科外来)、薬剤部からのメンバーを構成員とする「静脈注射ワーキンググループ」を設立した。「抗癌剤の取り扱い」を中心課題とし、全病院的な院内設備、体制の確立を推し進めた。

安全で質の高い「がん薬物療法」に向けた体制の確立には、EBMに基づいた統一基準・ルールの制定が必要である。また、各診療科・臓器別の独自ルールを排した共通の基準・評価法が必要であり、院内体制の統一・整備を図っている。

3-1. 「抗癌剤取り扱いマニュアル」を作成し、統一した基準・ルールを示した。

3-2. 病院職員への教育・学習の場の整備として、全職

種に向けての報告会・勉強会を開催した。また、各現場での実地指導による啓蒙活動を行った。

3-3. 職員教育プログラムを作成し、新規採用職員から徹底した院内ルールの遵守と理解を図っている。

3-4. 医療者にとっても安全で質の高い医療が求められており、「医療従事者への職業上暴露の防止」といった観点から、エンドキサン調剤者の尿中排泄量測定を、また環境内汚染状況調査として、病棟内各所の拭き取り調査を行った。これらの測定データに基づき院内取り扱い体制の適正化と効率的な対策作りを推し進める。

#### D. 考察

「臨床腫瘍学」の開講は、がん化学療法への関心の高まりも有ってか学生には非常に好評であった。がん化学療法に対する理解を深め、興味を強く持たせることによって次世代を担う優秀な人材の育成に貢献出来ると確信している。

「外来化学療法部」の設置は、病院の経営上の収支以外にも治療環境の整備による患者満足度の向上、専任スタッフによる安全の担保など多くのメリットが見込まれる。さらに、がん化学療法の分野で優れた医療人を養成する事により、教育面での貢献など多くの将来性の有る分野であり、これからの活動が大いに期待される。

「静脈注射ワーキンググループ」では、抗癌剤の取り扱いを中心テーマとし、全病院的な院内設備、体制の確立を推し進めた。病院職員への教育・学習の場として、全職種に向けての報告会・勉強会を開催し、がん薬物療法に対しての理解を深める事が出来た。

更に、院内暴露・汚染状況調査を行うことにより、「医療従事者への職業上暴露の防止」の視点を広く浸透させる事が出来た。日本の現状では、まだ十分な認識が得られていない部分であるが、具体的なデータを示す事により効率的で十分な対策をとる事が出来ると期待される。

これらの取り組みを通じて、臨床実習、卒後教育、更にはコメディカル教育にも役立て、安全で質の高い「がん薬物療法」の教育の場を提供したい。

#### E. 結論

がん薬物療法を臓器横断的に支援する組織として、「外来化学療法に関する懇談会」による検討を基に、「外来化学療法部」を開設した。

また、「静脈注射ワーキンググループ」の設立により、大学病院における安全で質の高い「がん薬物療法」、EBMに基づいた薬物療法の推進のため、学生、研修医、診療科医師、コメディカル全体に対しての教育活動を開始した。教育・実践の場として全病院的な院内全体でのシステム構築と整備が必要であり、医師のみでなく看護部、薬剤部も含めた相互の協力関係の基で整備・構築を推し進めている。

#### G. 研究発表

1. 論文発表: Yanada M, Takeuchi J, Sugiura I, Akiyama H, Usui N, Yagasaki F, Kobayashi T, Ueda Y, Takeuchi M, Miyawaki S, Maruta A, Emi N, Miyazaki Y, Ohtake S, Jinnai I, Matsuo K, Naoe T, Ohno R; Japan Adult Leukemia Study Group. High complete remission rate and promising outcome by combination of imatinib and chemotherapy for newly diagnosed BCR-ABL-positive acute lymphoblastic leukemia: a phase II study by the Japan Adult Leukemia Study Group. J Clin Oncol. 2006 Jan 20;24(3):460-6.

#### 2. 学会発表:

2006年3月 第4回日本臨床腫瘍学会 ポスター発表  
名古屋大学病院での抗癌剤取り扱い体制整備への取り組み。

大野稔人、直江知樹 他

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得: 特になし
2. 実用新案登録: 特になし
3. その他: 特になし

厚生労働科学研究費補助金(がん臨床研究事業)  
分担研究報告書

大学における効果的かつ効率的ながん専門医の育成方法に関する研究

分担研究者 分担研究者 杉山 徹 岩手医科大学医学部 産科婦人科学教室 教授

研究要旨 「効果的かつ効率的ながん専門医育成のための卒前教育カリキュラム」として、すべての医学生に「モデル・コア・カリキュラム」の中でがんに対する横断的・系統的なプライマリーケアとしての理解を充実させると同時にがん専門医を目指す医学生に対して「がん専門医を目指すための特化した卒前教育」の充実が重要である。本研究では「モデル・コア・カリキュラム」と対応した「特色ある教育」カリキュラムを作成した。また、施設内では学生教育の早い段階から、「腫瘍学」の課題でのPBL-Tutorialを設け、がんのbiologyとともに標準的な治療、実験的な治療の検索ができるように準備を進めた。

#### A. 研究目的

本研究は、「効果的かつ効率的ながん専門医育成のための卒前教育カリキュラム」として、「モデル・コア・カリキュラム」に対応した「特色ある教育」の作成と位置づけた。モデル・コア・カリキュラムの中で、1)卒前教育として腫瘍学の基礎(生物学、病因、疫学等)や総論(手術、放射線、抗癌剤、支持療法・緩和療法)を臓器横断的に学べる教育の実践を目指し普及を図る。さらに、がん専門医育成のための特色ある卒前教育カリキュラムの作成を行なう。これら卒前教育が効果的・効率的に機能することで、がん専門医を目指した卒後教育がさらに充実すると考えられる。

#### B. 研究方法

1)今後重要性を増すがん治療専門医の育成のためには、プライマリーケア医の育成を念頭においた現行の「モデル・コア・カリキュラム」の見直しながん医療の観点から必要と考えられる。本研究では、これにそってがん専門医育成のための卒前教育として卒後教育に繋がる「特色ある教育」として、総論、各領域の検討を行い、アイテム内のkey wordを挙げ、key wordごとの到達レベル、目標到達のための方策、到達度の評価法を作成する(東京女子医科大学 神津忠彦先生、福岡大学 田村和夫先生、九州大学 前原喜彦先生と共同研究班)。

2)卒前教育として医学部入学時よりのProblem-based learning (PBL)-Tutorial Sessionのがん分野の充実を図る。

#### C. 研究結果

1)現行の「モデル・コア・カリキュラム」ではC. 人体各器官の正常構造と機能、病態、診断、治療に関して分野別に縦断的な学習形式が示されている。がんは遺伝子の多重変異として発症することを考えると、D.全身に

およぶ生理的変化、病態、診断、治療として「腫瘍」という項目を通じて横断的な理解を促進することで、がん専門医としてがん患者へのプライマリーケアが可能になると考えられる。癌遺伝子、抑制遺伝子をはじめ、腫瘍の発生・増殖に関与する因子や腫瘍マーカーは統合して学ぶ必要がある。さらにがん用に用いられる薬剤は共通点が多く、その使用も通常の薬剤よりその作用機序や効果への理解が必要である。これらコアカリキュラムに基づき、横断的に腫瘍学が効果的・効率的に学べるようながん専門医育成のための卒前教育として「特色ある教育」カリキュラム作成を行い、以下の項目を設け、それぞれのkey wordを検討し、key wordごとの到達レベル、目標到達のための方策、到達度の評価法を作成した。I.がんに対する基礎知識、II.基本的診察技能、III.医療面接、インフォームドコンセント、IV.診断、V.病期分類、VI.治療、VII.腫瘍関連緊急対策、VIII.腫瘍随伴症候群、IX.緩和医療、X.Evidence-based Medicine(EBM)と臨床試験、XI.安全管理。

2)問題解決への教育として、PBL-Tutorialの腫瘍に関する課題を「腫瘍学」として充実させ、がんのbiologyとともに標準的な治療、実験的な治療の検索ができるよう岩手医科大学教務委員会へ提言した。

#### D. 考察

すべての医学生に「モデル・コア・カリキュラム」の中で増加するがんに対する横断的・系統的なプライマリーケアとしての理解の充実、さらに「がん専門医」を目指す医学生に対して「がん専門医を目指すための特化した卒前教育」としてコアカリキュラムに対応した「特色ある教育」カリキュラム作成を研究班として行なったが、今後、改定されるコアカリキュラムと本カリキュラムが相加・相乗的に作用することで、がん専門医を目指す卒

前教育が充実化へ向けて機能することが期待される。一方、岩手医科大学内では、学生教育の早い段階から、「腫瘍学」の課題でのPBL-Tutorialを設け、がんのbiologyとともに標準的な治療、実験的な治療の検索ができるように準備を開始した。

#### E. 結論

がん専門医を志す医学生に対するコアカリキュラムに対応する「特色ある教育」カリキュラム作成を作成し、卒前教育の充実が期待される。また、個々の施設ではPBL-Tutorialから「モデル・コア・カリキュラム」での腫瘍学としての横断的な教育システムの構築が必要である。

#### G. 研究発表

##### I. 論文発表

1. 杉山徹、喜多川亮、嘉村敏治. 新薬展望 2005 子宮悪性腫瘍治療薬. 医薬ジャーナル(増刊号) 41(S-1):181-188, 2005
2. 杉山徹: 卵巣癌におけるセカンドライン化学療法の選択とその意義. 癌と化学療法 32:28-32, 2005
3. 竹内聡、杉山徹: 子宮頸癌・体癌における腫瘍マーカーとその利用の仕方. 成人病と生活習慣病35(6):663-667, 2005
4. 杉山徹、小見英夫、岩根恵子: 婦人科領域のピットフォール 3. 腹式子宮全摘手術における合併症対策. 産婦人科の実際: 54 :417-424, 2005
5. 寺内文敏、杉山徹: 安全な婦人科手術をめざして「腹腔内播種病巣の摘出」大網切除を含めて卵巣癌で要求させるもの. 臨床婦人科産科 59(5):753-755, 2005.
6. 杉山徹: 明細胞癌に対する化学療法-First-line, Second-line. 産科と婦人科 72(5):606-612, 2005.
7. 杉山徹: 婦人科癌. 漢方と最新治療. 14(2):141-147, 2005
8. 杉山徹: 卵巣癌. 癌と化学療法 32:1096-1103, 2005
9. 竹内聡、杉山徹: 子宮頸癌・体癌における腫瘍マーカーとその利用の仕方. 成人病と生活習慣病35(6):663-667, 2005
10. 杉山徹: わが国の臨床研究の問題点と対策. 産科と婦人科 72(9):1164-1169, 2005
11. 杉山徹、利部正裕: 開腹・閉腹手技[1]、産婦人科手術スタンダード(日本産婦人科手術学会 編)、MEDICAL VIEW, p8-17, 2005

##### II. 学会

1. 杉山徹: シンポジウム: がん腫別化学療法のガイドライン「卵巣がん治療ガイドライン」第3回日本臨床腫瘍学会総会、2005/3/4~5、横浜.
2. Sugiyama T. Advanced Hands-On Upper Abdominal and Pelvic Debulking Techniques: Modern Reconstructive Surgery. Postgraduate Course 8. Society of Gynecologic Oncologist's 36th Annual

Meeting, 2005/3/19~23, Miami Beach, Florida.

3. 杉山徹: 生涯教育プログラム「産婦人科手術: 単純子宮全摘術」、日本産科婦人科学会総会、2005/4/2、京都
4. 杉山徹: 卒後研修プログラム Meet & Stump The Professor 「腫瘍」、日本産科婦人科学会総会、2005/4/4、京都
5. 杉山徹: ランチョンセミナー「卵巣癌治療の標準化への取り組み」日本産科婦人科学会総会、2005/4/4、京都
6. Sugiyama T, Omi H, Kigawa J, Hatae M, Suzuki M, Tsuda H. Phase I study of paclitaxel (TXL), doxorubicin (ADM) and carboplatin (CBDCA) combination therapy (TAC) in patients with high-risk and recurrent endometrial cancer. 41th American Society of Clinical Oncology. Orlando, USA, 2005/5
7. Nishio S, Sugiyama T, Shoji T, Kitagawa R, Ushijima K, Kamura T. Phase II study of irinotecan plus oral etoposide in patients with platinum and taxane-resistant ovarian cancer. 41th American Society of Clinical Oncology. Orlando, USA, 2005/5
8. Takano M, Kita T, Kikuchi Y, Yaegashi N, Kuzuya K, Tsuda H, Suzuki M, Kigawa J, Takeuchi S, Sugiyama T. Clinical characteristics of clear cell adenocarcinoma of the ovary-Japan Clear Cell Carcinoma Study Group-41th American Society of Clinical Oncology. Orlando, USA, 2005/5
9. 杉山徹: 「がん薬物標準療法の現状とその展望」婦人科悪性腫瘍: 卵巣癌、子宮頸・体癌. 第53回化学療法学会シンポジウム、2005/5/26、東京
10. 杉山徹: 「卵巣癌の診断・治療~細胞像も含めて」第42回日本臨床細胞学会東北支部連合会ランチョンセミナー 2005/7/2、仙台
11. Sugiyama T and Kigawa J. New strategy against ovarian carcinoma based on biological behavior with specific focus at clear cell carcinomas. Franco-Japanese Meeting on Cancer Chemotherapy in Sapporo. 2005/9/17, Sapporo
12. 杉山徹: 「婦人科がん臨床試験の現状と今後の世界の動向」. 第11回がん臨床試験のCRCセミナー、2005/9/18、東京

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定含)  
なし。

研究成果の刊行に関する一覧表

2005年4月から2006年3月(in press分含む)まで

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
大原房子、高野利実、 大江裕一郎	EGFR阻害剤と他の分子標的薬と の併用療法.	分子呼吸器病	9	168-171	2005
高野真吾、楠本昌彦、 立石宇貴秀、松野吉 宏、大江裕一郎、浅村 尚生	若年者気管原発小細胞癌の1例	肺癌	45	133-137	2005
大江裕一郎	肺の癌性リンパ管症の診断と治 療	日本医事新報	4244	87-88	2005
大江裕一郎	国立がんセンター中央病院の外 来化学療法	癌と化学療法	32	20004-2005	2005
小倉孝氏、加藤晃史、 大江裕一郎	間質性肺炎	Medicina	42	2005-2011	2005
大江裕一郎	わが国の大規模臨床試験FACS の成績から	呼吸器NEWS&VIEWS 2005-2006	27	5-7	2005
原田英博、新明裕子、 大江裕一郎	III期非小細胞肺がんの放射線化 学療法	呼吸器科	9	93-100	2006
大江裕一郎、南 博 信、横山雅大、安井久 晃	がん薬物療法専門医制度の展望	The Medical Oncologists	特別号	2-11	2006
Ohe Y, Negoro S, Matsui K, Nakagawa K, Sugiura T, Takada Y, Nishiwaki Y, Yokota S, Kawahara M, Saijo N, Fukuoka M, Ariyoshi Y	Phase I-II Study of Amrubicin and Cisplatin in Previously Untreated Patients with Extensive-Stage Small-Cell Lung Cancer.	Ann Oncol	16	430-436	2005
Yamamoto N, Tamura T, Murakami H, Shimoyama T, Nokihara H, Ueda Y, Sekine I, Kunitoh H, Ohe Y, Kodama T, Shimizu M, Nishio K, Ishizuka N, Saijo N	Randomized Pharmacokinetic and Pharmacodynamic Study of Docetaxel: Dosing Based on Body-Surface Area Compared With Individualized Dosing Based on Cytochrome P450 Activity Estimated Using a Urinary Metabolite of Exogenous Cortiso	J Clin Oncol	23	1061-1069	2005
Ishikura S, Ohe Y, Nihei K, Kubota K, Kakinuma R, Ohmatsu H, Goto K, Niho S, Nishiwaki Y, Ogino T.	A phase II study of hyperfractionated accelerated radiotherapy (HART) after induction cisplatin (CDDP) and vinorelbine (VNR) for stage III Non-small-cell lung cancer (NSCLC).	Int J Radiat Oncol Biol Phys	61	1117-1122	2005

Hichiya H, Tanaka-Kagawa T, Soyama A, Jinno H, Koyano S, Katori N, Matsushima E, Uchiyama S, Tokunaga H, Kimura H, Minami N, Katoh M, Sugai K, Goto YI, Tamura T, Yamamoto N, <u>Ohe Y</u> , Kunitoh H, Nokihara H, Yoshida T, Minami H, Saijo N, Ando M, Ozawa S, Saito Y, Sawada JI.	Functional Characterization of Five Novel CYP2C8 Variants, G171S, R186X, R186G, K247R and K383N, Found in a Japanese Population.	Drug Metab Dispos	33	630-636	2005
Ikeda S, Kurose K, Jinno H, Sai K, Ozawa S, Hasegawa R, Komamura K, Kotake T, Morishita H, Kamakura S, Kitakaze M, Tomoike H, Tamura T, Yamamoto N, Kunitoh H, Yamada Y, <u>Ohe Y</u> , Shimada Y, Shirao K, Kubota K, Minami H, Ohtsu A, Yoshida T, Saijo N, Saito Y, Sawada JI.	Functional Analysis of Four Naturally Occurring Variants of Human Constitutive Androstane Receptor	Mol Genet Metab	61	1117-1122	2005
Takano T, <u>Ohe Y</u> , Sakamoto H, Tsuta K, Matsuno Y, Tateishi U, Yamamoto S, Nokihara H, Yamamoto N, Sekine I, Kunitoh H, Shibata T, Sakiyama T, Yoshida T, Tamura T.	Epidermal Growth Factor Receptor Gene Mutations and Increased Copy Numbers Predict Gefitinib Sensitivity in Patients with Recurrent Non-Small-Cell Lung Cancer.	J Clin Oncol	23	6829-6837	2005
Yamazaki S, Sekine I, Matsuno Y, Takei H, Yamamoto N, Kunitoh H, <u>Ohe Y</u> , Tamura T, Kodama T, Asamura H, Tsuchiya R, Saijo N	Clinical responses of large cell neuroendocrine carcinoma of the lung to cisplatin-based chemotherapy	Lung Cancer	49	217-223	2005
Takano T, <u>Ohe Y</u>	Erlotinib in lung cancer	N Engl J Med	353	1739-1741	2005
<u>Ohe Y</u>	Chemoradiotherapy for lung cancer	Expert Opin Pharmacother	6	2793-2804	2005

Matsui K, Hirashima T, Nitta T, Kobayashi M, Ogata Y, Furukawa M, Kudoh S, Yoshimura N, Mukohara T, Yamauchi S, Shiraishi S, Kamoi H, Negoro S, Takeda K, Nakagawa K, Takada M, Yana T, <u>Fukuoka M.</u>	A phase I/II study comparing regimen schedules of gemcitabine and docetaxel in Japanese patients with stage IIIB/IV non-small cell lung cancer.	Jpn J Clin Oncol	35	181-187	2005
Ohe Y, Negoro S, Matsui K, Nakagawa K, Sugiura T, Takada Y, Nishiwaki Y, Yokota S, Kawahara M, Saijo N, <u>Fukuoka M, Ariyoshi Y.</u>	Phase I-II study of amrubicin and cisplatin in previously untreated patients with extensive-stage small-cell lung cancer.	Ann Oncol	16	430-436	2005
Sugiura T, Ariyoshi Y, Negoro S, Nakamura S, Ikegami H, Takada M, Yana T, <u>Fukuoka M.</u>	Phase I/II study of amrubicin, a novel 9-aminoanthracycline, in patients with advanced non-small-cell lung cancer.	Invest New Drugs	23	331-337	2005
Yoshimura N, Kudoh S, Kimura T, Mitsuoka S, Matsuura K, Hirata K, Matsui K, Negoro S, Nakagawa K, <u>Fukuoka M.</u>	EKB-569, a new irreversible epidermal growth factor receptor tyrosine kinase inhibitor, with clinical activity in patients with non-small cell lung cancer with acquired resistance to gefitinib.	Lung Cancer	51	363-368	2005
Yonesaka K, Tamura K, Kurata T, Satoh T, Ikeda M, <u>Fukuoka M,</u> Nakagawa K.	Small interfering RNA targeting survivin sensitizes lung cancer cell with mutant p53 to adriamycin.	Int J Cancer		812-820	2006
Tamura K. and <u>Fukuoka M.</u>	Gefitinib in non-small cell lung cancer	Expert Opin Pharmacother	6(6)	985-993	2005
Yamamoto N, Tsurutani J, Yoshimura N, Asai G, Moriyama A, Nakagawa K, Kudou S, Takada M, Minato Y, <u>Fukuoka M.</u>	Phase II study of weekly paclitaxel for Relapsed and refractory small cell lung cancer.	Anticancer Res			2006 in press
Okamoto I, Araki J, Suto R, Shimada M, Nakagawa K, <u>Fukuoka M.</u>	EGFR mutation in gefitinib-responsive small-cell lung cancer.	Ann Oncol			2006 in press
Ohe Y, Negoro S, Matsui K, Nakagawa K, Sugiura T, Takada Y, Nishiwaki Y, Yokota S, Kawahara M, <u>Saijo N,</u> Fukuoka M, Ariyoshi Y.	Phase I-II study of amrubicin and cisplatin in previously untreated patients with extensive-stage small-cell lung cancer.	Ann Oncol	16(3)	430-436	2005
Atagi S, Kawahara M, Tamura T, Noda K, Watanabe K, Yokoyama A, Sugiura T, Senba H, Ishikura S, Ikeda H, Ishizuka N, <u>Saijo, N.</u>	Standard thoracic radiotherapy with or without concurrent daily low-dose carboplatin in elderly patients with locally advanced non-small cell lung cancer: a phase III trial of the Japan Clinical Oncology Group (JCOG9812).	Jpn J Clin Oncol	35(4)	195-201	2005

Ichinosuke Hyodo, Noriko Amano, <u>Kenji Eguchi</u> , Masaru Narabayashi, Jiro Imanishi, Midori Hirai, Tomohito Nakano, Shigemitsu Takashima	Nationwide survey on complementary and alternative medicine in cancer patients in Japan.	J Clin Oncol.	23	2645-2654	2005
田仲曜, 永島浩子, 奥山徹, <u>江口研二</u>	保険医療となった癌緩和ケアチームとは	日本胸部臨床	64巻1号	22-30	2005
Yoshiyuki Abe, Kouzou Hanai, Makiko Nakano, Yasuyuki Ohkubo, Toshinori Hasizume, Toru Kakizaki, Masato Nakamura, Noboru Niki, <u>Kenji Eguchi</u> , Tadahiko Fujino, Noriyuki Moriyama	A Computer-aided Diagnosis (CAD) System in Lung Cancer Screening with Computed Tomography.	Anticancer Research	25	438-8	2005
<u>江口研二</u>	肺癌検診-現状と今後-	肺癌最新医学別冊	呼吸器	47-56	2005
Satoshi Morita, Kunihiko Kobayashi, Yasuo Ohashi, <u>Kenji Eguchi</u> , Masahiko Shibuya, Taketoshi Matsumoto, yasufumi Yamaji, Keiichi Nagao, Junichi Sakamoto, Hisanobu Niitani,	Weekly Assessment of Quality of Life in Patients with Advanced Non-small-cell Lung Cancer during Chemotherapy in a Randomized Phase III Trial..	Ann Cancer Res and Therapy	12	105-17	2004
Satoshi Morita, Kunihiko Kobayashi, <u>Kenji Eguchi</u> , Taketoshi Matsumoto, Masahiko Shibuya, Yasufumi Yamaji, Yasuo Ohashi.	Analysis of incomplete quality of life data in advanced stage cancer: A practical application of multiple imputation.	Quality of Life Research	12	1533-44	2005
<u>田村和夫</u>	専門医等が果たす役割 臨床腫瘍専門医と社会への貢献	臨床医	31	1317-1320	2005
<u>田村和夫</u>	臨床腫瘍学の現状と展望IV.がん治療をめぐる欧米と日本の違い	Progress in Medicine	25	39-43	2005
<u>田村和夫</u>	欧米における腫瘍内科医	Modern Physician	25	1211-1216	2005
Yanada M, Takeuchi J, Sugiura I, Akiyama H, Usui N, Yagasaki F, Kobayashi T, Ueda Y, Takeuchi M, Miyawaki S, Maruta A, Emi N, Miyazaki Y, Ohtake S, Jinnai I, Matsuo K, <u>Naoe T</u> , Ohno R; Japan Adult Leukemia Study Group	High complete remission rate and promising outcome by combination of imatinib and chemotherapy for newly diagnosed BCR-ABL-positive acute lymphoblastic leukemia: a phase II study by the Japan Adult Leukemia Study Group.	J Clin Oncol	24	460-6	2006

Ito Y, Ohyashiki K, Hirai H, Ogawa S, Mitani K, Hotta T, Bessho M, <u>Naoe T</u> , Mizoguchi H, Uchiyama T, Omine M.	Assessment of the international prognostic scoring system for determining chemotherapeutic indications in myelodysplastic syndrome: Japanese retrospective multicenter study.	Int J Hematol	82	236-42	2005
Yanada M, Matsuo K, Suzuki T, Kiyoi H, <u>Naoe T</u> .	Prognostic significance of FLT3 internal tandem duplication and tyrosine kinase domain mutations for acute myeloid leukemia: a meta-analysis.	Leukemia	19	1345-9	2005
Yanada M, Matsuo K, Emi N, <u>Naoe T</u> .	Efficacy of allogeneic hematopoietic stem cell transplantation depends on cytogenetic risk for acute myeloid leukemia in first disease remission: a metaanalysis.	Cancer	103	1652-8	2005
直江 知樹	がん薬物療法の実際 血液腫瘍	Progress in Medicine	25	2055-58	2005
木下 朝博, 直江 知樹	悪性リンパ腫	内科	96	1037-1045	2005
杉山徹、喜多川亮、嘉村敏治	子宮悪性腫瘍薬	医薬ジャーナル	41	181-188	2005
杉山徹	卵巣癌におけるセカンドライン化学療法の選択とその意義	癌と化学療法	32	28-32	2005
竹内聡、杉山徹	子宮頸癌・体癌における腫瘍マーカーとその利用の仕方.	成人病と生活習慣病	35(6)	663-667	2005
杉山徹、小見英夫、岩根恵子	婦人科領域のピットフォール 3. 腹式子宮全摘手術における合併症対策.	産婦人科の実際	54	417-424	2005
寺内文敏、杉山徹	安全な婦人科手術をめざして「腹腔内播種病巣の摘出」大網切除を含めて卵巣癌で要求させるもの.	臨床婦人科産科	59(5)	753-755	2005
杉山徹	明細胞癌に対する化学療法-First-line、Second-line.	産科と婦人科	72(5)	606-612	2005
杉山徹	婦人科癌.	漢方と最新治療	14(2)	141-147	2005
杉山徹	卵巣癌.	癌と化学療法	32	1096-1103	2005
竹内聡、杉山徹	子宮頸癌・体癌における腫瘍マーカーとその利用の仕方.	成人病と生活習慣病	35(6)	663-667	2005
杉山徹	わが国の臨床研究の問題点と対策.	産科と婦人科	72(9)	1164-1169	2005

研究成果の刊行に関する一覧表 2005年4月から2006年3月(in press分含む)まで  
書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
中野絵里子、加藤晃史、大江裕一郎	進行非小細胞肺癌の化学療法。加藤治文ほか編MOOK2004-2005.		肺癌の臨床	篠原出版新社	東京	2005	237-245
大江裕一郎	臨床腫瘍専門医	西條長宏	インフォームドコンセントのための図説シリーズ がん薬物療法における支持療法	医薬ジャーナル社	大阪	2005	74-76,
西條長宏、福岡正博、大江裕一郎、原田実根、堀田知光、桑野信彦、直江知樹、新津洋司郎、高嶋成光、鶴尾隆、上田龍三、根来俊一、石岡千加史、中西洋一、畠清彦、田村和夫、秋田弘俊、吉川裕之、徳田裕、大津敦。	腫瘍内科学の進歩と変遷。	金倉譲	臨床腫瘍内科学入門	永井書店	大阪	2005	1-5
新明裕子、大江裕一郎	内科から見た小細胞癌の外科治療篠原出版新社、東京、pp193-199, 2006.	加藤治文ほか	肺癌の臨床MOOK2005~2006	篠原出版新社	東京	2006	193-199
佐々木常雄	胃癌治療ガイドライン	千葉 勉	消化器疾患診療実践ガイド	文光堂	東京	2005	833-836
佐々木常雄	医療事故予防	荒井邦佳	スーパーローテート対応 ドクターズ・マニュアル	文光堂	東京	2005	426-429
沖 英次、馬場秀夫、前原喜彦	化学療法の実際 4 胃癌 化学療法の実際	金倉 譲	臨床内科学入門 VIII	金原出版	東京	2005	244-249
木澤義之	緩和ケアにおける医師の 卒後研修の現状と展望	(財)日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団 「ホスピス緩和ケア白書2006」編集委員会	ホスピス緩和ケア白書 2006	非売品. ISBN4-903246-02-7	大阪	2006	12-16

高塚雄一、渡辺亨、伊藤良則、岩田広治、大野真司、日馬幹弘、小林直、佐伯俊昭、鹿間直人、徳田裕、佐野宗明、田部井敏夫、晴山雅人、福井次矢、光山昌珠、池田正、安藤二郎、稲治英生、岩平佳子、高橋かおる、福富隆志	外科療法	日本乳癌学会	化学的根拠に基づく乳癌診療ガイドライン 2005年版	金原出版	東京	2005	
Tadahiko Kozu	Clinical education in Japanese medical schools	Korean Society of Medical Education	Clinical Medical Education: Lecture book	Korean Society of Medical Education	Seoul	2005	13-21
Tadahiko Kozu	Curricular innovation in medical education in Japan	Medical Education Unit Yong Loo Lin School of Medicine	Curriculum TIPS: Lecture book of the 3rd Asia Pacific Conference of Medical Education	National University of Singapore	Singapore	2006	60
江口研二 清水英二 監訳	予防とスクリーニング	江口研二 清水英二	ギンスバーグ 肺癌 アメリカ肺癌協会 監訳	西村書店	東京	2005	
柳田 正光 直江 知樹	癌化学療法 update 白血病(分担)			中外医学社		2005	477-484
直江 知樹 他	臨床腫瘍内科学入門 腫瘍内科学の進歩と変遷(分担)			永井書店		2005	1-6
杉山徹、利部正裕	開腹・閉腹手技(1)	日本産婦人科手術学会	産婦人科手術スタンダード	MEDICAL VIEW	東京	2005	8-17